修士論文（要旨）
2014 年 1 月

中国 A 大学における映像メディアを用いた日本語「視聴説」授業の研究
―映画をリソースとした対話重視の授業実践から―

指導　宮副ウォン裕子　教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
212J3013
清水美帆

目 次

用語の定義 1
第 1 章 はじめに 2
1.1 研究背景 2
1.2 「視聴説」 3
1.3 研究目的 6
第 2 章 先行研究 7
2.1 協働学習（ピア・ラーニング） 7
2.2 映像作品を用いた実践研究 9
第 3 章 調査概要 11
3.1 A 大学概要 11
3.2 事前調査 12
3.2.1 事前調査概要 12
3.2.2 事前調査結果 13
3.3 実践授業 14
3.3.1 学習者 14
3.3.2 授業の目標 15
3.3.3 使用した映画の選択方法と理由 15
3.3.4 授業内容と手順 17
3.4 使用するデータ 20
第 4 章 対話の分析 21
4.1 D グループの対話 21
4.1.1 D グループの対話全体の流れ 22
4.1.2 データ D1（場面描写と感情表出） 22
4.1.3 データ D2（日本の社会文化への気づき） 25
4.2 C グループの対話 27
4.2.1 C グループの対話全体の流れ 27
4.2.2 データ C3（理解内容の修正・深化） 29
4.2.3 データ C4（「創造」が起きた対話） 30
4.2.4 データ C5（「話し合いのヒント」についての対話） 32
第 5 章 実践後調査 35
5.1 実践後調査概要 35
5.2 質問紙調査結果 36
5.3 インタビュー調査結果 39
5.3.1 学習者が実感した効果 39
5.3.2 教師にしてほしいこと 45
5.4 「視聴説」全体に関わる課題 49
第 6 章 総合的考察 51
6.1 学習者の学び 51
6.2 授業の課題と教師に求められること 53
第 7 章 まとめと今後の課題 56
7.1 本研究で明らかになったこと 56
7.2 今後の課題 56
参考文献
資料

要　旨

本研究は，中国 A 大学にて行った映画を用いた日本語授業の実践研究である。中国の日本語教育では「視聴説」と呼ばれる映像メディアを用いた授業が開設されている。しかし，映画やアニメ等の映像作品は，国内外で学習リソースとして活用が期待される一方で，教師は効果的な方策を見出せていないという現状が報告されている（谷口 2011, 保坂他 2012）。また，現在中国にいる学習者は日常的に日本の映像作品を個人で視聴し，さらに独自の方策を用いて独習に活用している（三國他 2011）。それだけに，「視聴説」授業では，クラス授業ならではの方法の検討が急がれる。そこで，本研究では協働学習の実践研究を参考に授業をデザインし，映画を用いた対話重視の実践を試みた。本研究の目的は，以下 2 点について明らかにし，「視聴説」授業改善のための示唆を得ることである。

RQ1 :「視聴説」授業において，映像作品視聴後の対話を通して，学習者はどのような学びを創出しているか

RQ2 :「視聴説」授業において，教師は何をすべきか

実践の対象となった学習者は中国 A 大学に在籍する日本語専攻者 28 名で，日本語学習歴は約 2 年半であった。映画『バブルへ GO!!』および『時をかける少女（2010 年実写版）』を用いて 6 回の授業を行い，以下 2 種類の活動を実施した。

A)「活動①②」…映画の冒頭部分を視聴し, 内容理解を問う正誤問題に個人で解答し，その後グループで解答と根拠を話し合い理解を補い合う。この活動を映画の冒頭 10 分で繰り返し 2 回行う。

B)「まとめの活動」…映画を全て視聴後，グループで約 20～25 分感想を話し合う。対話が順調に進まない際には，「話し合いのヒント」を参考にする。

いずれの活動も 4 人グループで行い，原則日本語で話し合った。対話内容をグループごとに録音・文字化し，分析データとした。また，全ての実践授業の終了後に，実践後調査として，協力者全員を対象とした質問紙調査，および 10 名を対象としたインタビュー調査を実施した。

学習者の学びと課題を分析するため，以下 2 つの方法でデータの分析を行った。まず活動 A，B の対話を質的に分析し，そこで起きている学びと課題を考察した。ただし，活動 A については清水他（2013）で報告しているため，本稿では活動 B における対話を中心に記述した。次に，実践後調査のデータを基に，学習者自身がどのような学びがあったと感じ，教師に何を求めているか分析・考察した。

対話の分析の結果，学習者が映画を共通体験として，映画の感動的・印象的なシーンを話題に，場面描写と自身の感情表出を繰り返し行っていることが明らかになった。また，池田・舘岡（2007）が協働を考える際の主要概念として挙げた 5 要素，1）対等，2）対話，3）創造，4）プロセス，5）互恵性，以上を全て満たす協働的な対話が行われていた。映画から日本の社会文化への気づきも見られた。気づきを強めるために，自国の社会文化や，他の映像作品および教室外で得た情報等を有効に既有知識として活用し,「創造」へ向かう対話が協働的に実現されていた。また，実践後調査の結果，仲間から新たな発見があっただけでなく，時には考えを変容し，時には自分の考えを見直し再認識するなど，仲間の発言を取捨選択しながら「創造」に向かっていたことも明らかになった。

授業の課題として,「話し合いのヒント」の検討,「創造」に至るためのしかけ作り，言語面の学習への対処等の具体的な課題のほか,メディア･リテラシーの養成が挙げられた。学習者自身が教師に求めることとして,映画に関連する日本社会･文化等の情報の補足や,教師自身も一視聴者として感想を話すことが求められていることが示された。また，教室外の個人視聴で得た知識を「視聴説」授業で活用するため，教室のソトからウチへつなぐ授業設計を行うことも必要であることを述べた。

本研究から，映画の視聴後の対話における学習者の学びの一端を明らかにすることができた。今後は学びを実証的に示す研究も行い,「視聴説」授業の評価方法を検討することが急務である。また，今後も継続して実践研究を積み重ね，活動デザインを行っていくと同時に，時代の変化とともに映像メディアが日本語教育現場で果たせる役割を見直していかなければならない。

参考文献

池田玲子・舘岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房

石塚美枝・守谷智美・宮副ウォン裕子（2008）「メディア・リテラシーを育てる『現代大衆文化』:参加者の多様性・多文化理解を促す日本語授業実践」『桜美林言語教育論叢』4, 15-24.

石塚美枝・宮副ウォン裕子・守谷智美（2012）「メディア・リテラシー育成をめざした『現代大衆文化』の授業実践」『2012 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』55-66.

岩下智彦（2013）「習熟度に差のあるクラスにおける学習者の主体的な学び―30 分の映像作品を用いた生きた文脈による授業実践―」『日本語教育学会秋季大会予稿集』139-144.

岩下智彦・岩本尚希・三國喜保子・谷口美穂（2012）「マルチメディア日本語コンテンツ使用時における学習ストラテジーの特徴」『桜美林言語教育論叢』8，125-141.

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法:原理・方法・実践』新曜社

清水美帆・岩下智彦・篠崎佳恵・高橋敦・臼井直也（2013）「映画を用いた実践における学習者同士のインターアクション―内容理解タスク時のやりとりの特徴と学び―」『日本語教育学会秋季大会予稿集』127-132.

徐燕（2011）「映像作品の教材化に向けて」『東アジア日本語教育・日本文化研究』14, 335-353.

鈴木みどり（2013）『最新版 study guid メディア・リテラシー入門編』リベルタ出版

舘岡洋子(2005)『ひとりで読むことからピア・リーディングへ―日本語学習者の読解過程と対話的協働学習』東海大学出版会

――（2007）『日本語教育の授業場面における協働学習』科学研究費補助金基盤研究研究成果報告書

谷口美穂（2011）「日本語教育における学習リソースとしての視聴覚メディア―インタビューからみえた学習者と教師の視点のずれ―」2010 年度桜美林大学大学院言語教育研究科修士論文

張春梅（2008）「中国人日本語学習者に異文化間コミュニケーション能力養成のための日本語 DVD 映画利用の有効性に関する基礎的研究―中国の大学における日本語専攻の授業改善―」『教育学研究年報』27，p.157.

保坂敏子（2011）「映画・ドラマを通した『学び』の可能性①―対話中心の聴解授業とメディアリテラシー―」『異文化コミュニケーションのための日本語教育』344-345.

保坂敏子・Gehrtz 三隅友子・門脇薫(2012）「映像作品を利用した日本語教育の体系化に向けて―海外における利用実態と教師の意識から―」『徳島大学国際センター紀要』47-59.

三國喜保子・谷口美穂・岩下智彦・川崎タルつぶら・張世襲・岩本尚希（2011）「日本語学習者の教室外におけるメディア使用の実態:6 カ国におけるアンケート調査から」『桜美林言語教育論叢』7，147-162.

楊峻（2010）「中国の大学の日本語専攻主幹科目へのグループワークの提案:言語生体保全の観点から」お茶の水女子大学大学院博士論文